

たち止まること

——「個人」への社会学的フィールドワークについて——

齋藤 雅哉

1. はじめに

彼は、それでねえ、やっぱりあのお生活からある程度離れてムラを見るって、ムラの中に入ってませんよ、あれ。絶対に入ってませんよ、離れてますよね。

(有賀 1977=2000: 17)

現在の社会のありようについて、たびたび「インタビュー社会」と指摘がされる¹⁾。日本ではどこかしらのマスコミが、ほぼ毎日、何かしらのインタビューをおこない、その様子を報道している。社会調査、特に質的調査研究の状況としては、社会調査士制度の誕生と呼応するように、質的研究にまつわる方法論が精緻化され、標準化される方向にあり、テキストも数多く刊行されている。このことは質的調査研究、特にフィールドワークにおいて何を意味するのだろうか。ある時代、フィールドワークを用いた研究は、調査者個人のスキルによって左右され、たびたび職人芸や名人芸と揶揄されていた時代があった。その時代から比べれば、方法論の標準化が進んでいる現状は望ましいと言えるのかもしれない。

しかし、素朴にも次のような疑問を持ってしまう。われわれの多くは日々、失敗を重ねながら生活を営んでいる。この明らかな事実に対して、フィールドワークにおける方法論の標準化は、どの程度の精度を保つことが出来るのだろうか。確かに、フィールドワークを始める時、フィールドワークの途中、そしてフィールドワークの成果を書

く段階においても、「正しさ」に出会えない感覚を持つことがある。そのため、質的調査研究法のテキスト化・標準化は、「正しさ」を与え不安を解きほぐす、とても重要な取り組みであると言えるだろう。ただ、自明のことではあるが、方法論の標準化によるフィールドの整地化がそのまま新たな知見を発見することにはならない。例えば、聞き取りの回数を重ねていくなかで、聞き取りに慣れてきた学生や大学院生がいたとしよう。彼ら/彼女らは、質的調査研究のテキストで描かれる(もしくは標準化された)プロセスをスムーズに遂行したとき、聞き取りが上手いと思うのかもしれない。確かに、自らの仮説に答えてくれるナラティブを聞きとった時、何とも表現しようのない衝動にかられることがある。ただ、この時の、聞き取りが上手い、とは何を意味するのか。問われなければならない。なぜなら、われわれは、繰り返しになるが、誤解をはじめとして日々失敗を重ねている。このどうしようもない事実と技法としての質的調査研究法の関係をわれわれはどのように取り扱うことが出来るのか。例えば、量的調査は、統計学の方法を導入することで、この問題に対応してきた。では、質的調査、特にフィールドワークではどのように対応するのだろうか。この点が検討されずに、質的調査研究法のテキスト化・標準化が進むことは、フィールドワークや聞き取り調査そのものの存在意義が問われることになる。もっと言ってしまうえば、われわれの日常生活は、無駄話など、一見「間違い」とされるものがなければ、成り立たない。この前提を踏まえた

日常生活の様相、社会学的モノグラフをいかに描くことが出来るか求められる。冒頭に掲げた調査者の立ち位置に関する有賀の指摘は、40年を超えてもなお、問われ続けるべき課題なのである。つまり、質的調査研究法がテキスト化・標準化されるなかで、社会学的モノグラフを描く、その試み自体を問い直す必要がある。

2節では、調査者の位置取りと視点について、検討する。3節では、ある先行者による「個人」の捉え方を検討する。「個人」にどのような社会関係の集積がみられるのか、社会関係の集積の場としての「個人」がどのように折り合いをつけたか、社会関係を作り替えたりするのか。その内的論理を問うことから〈社会的なるもの〉に接近することが出来ることと述べる。最後に、調査対象者の「その人なりの主体性」にグランデットすることを志向しながらも、同時に、自らの理解が届かないことに出来る限り立ち止まるフィールドワークを、「個人」への社会学的フィールドワークとよび、その可能性を指摘し本稿を閉じる。

2. 調査する私

文化人類学者のJ・クリフォードらは、フィールドワークを前提としながら、「調査する私」への配慮を求めた(Clifford & Marcus 1986=1996)。この指摘を踏まえるならば、われわれも対象に出会うときや、対象を描くとき、「調査する私」の存在を不可視化することは出来ない。例えば、ドキュメントを対象とした批判的言説分析は、自らの立場を明確にした形で分析がおこなわれる²⁾。他の質的調査研究法においても、調査対象と調査者の問いに適した方法と理論枠組みによって、調査・分析がおこなわれる。すなわち、「調査する私」は、理論枠組みを用いる際に、自らの準拠枠を何らかの形で示すことが求められる。言い直すならば、「問い」－「質的調査研究法」－「対象」という3項を往還する「調査する私」の存在が問われることになる。

では、「調査する私」が、質的調査研究法のテキスト化・標準化を忠実に実践するとはどのような営みなのだろうか。調査地被害をおこすようなフィールドワークはあってはならないからこそ、ある種の正しさは必要となる。ただし、実際問題として各技法によってカバーされる範囲があり、限られた範囲でデータを得ることになる。つまり、調査技法ごとの正しさがあり、データの性質も異なりを生むことになる。この点を考慮するならば、どのような技法を用いたとしても、そのまますぐに「対象を完全に理解した」ことにはならない。マニュアルを身につけた「調査する私」が、この点への配慮を怠った時、『よき』フィールドワーカーとして理論的にも方法論的にも堅い鎧で身を固めていけばいくほど、この傷つきやすさが忘れ去られてしまう危険性は残念ながら増していく(町村 2004: 60) ことになる。つまり、標準化された方法論を実践するよきフィールドワーカーになろうとする「調査する私」は、フィールドにおいて失敗する可能性を多分に持つことになる。聞き取り調査はもちろん、参与観察によるフィールド・ノートの作成や分析の段階、記述による客観化を経ても、先にあげたように「調査する私」の主観は、何かしらの形で入ってくる。そうであるからこそ、多くの間違いがあるにも関わらず、自らの発見をそのまますぐに、対象に対する客観的な知見であると理解する可能性がある。だからこそ、現実によって自らが裏切られていくことを引き受け、対象を捉えていこうとする態度が求められる。もう1つの態度として、フィールドにおいて対象に巻き込まれることから距離を取ることで、過剰な理解へと向かわずに自らがわかることを確実に理解していく態度がある。ただ、方法論的正しさや自らの理解のみに依拠した「分析できる調査」を志向する時には、目の前の対象者を捉えそこなう可能性を持ってしまう。つまり、ホルスタインらが繰り返し批判する、調査対象者を「回答の容器」(Holstein et al 1995=2004)と捉える認識に自らを近づけてしまうことになる。だから

こそ、小林多寿子（2000）が指摘するフィールドワークによって得られる知見に対して、「調査される私」と「調査する私」という二人のオーサーの存在を確認しておく必要がある。人と人の「間」を描く「コミュニケーションとしての社会調査」という視点である。

このような試みは、玉野和志が対象と「構造的な社会との連関が見えにくいがゆえに、唯一リアルと感じられる自分自身に執着するという傾向とも通ずるところがある」（玉野 2004: 77）と指摘するように、「調査する私」への執着と捉えられることもあるだろう。実際に、調査対象者について多くのことが触れられずに、「調査する私」が主な対象となってしまう調査研究も確かにある。ただ、「調査する私」は、本来フィールドワークにおいて、調査対象者が持つ多層性に自らを開き続けていく態度が求められる。つまり、玉野が批判する「自分自身への執着」に問いを立てることで、調査者－被調査者の関係を社会調査の関係としてのみ捉えるのではなく、さまざまな失敗や間違いが起りうる社会関係の一つとして捉え直そうとする試みである。

この試みを徹底する立場もある。例えば、〈いま＝ここ〉という局所的場面を、「文脈依存性」や「相互反映性」に着目しながら、局所的な相互行為を記述し、その場面ごとの社会関係に〈社会的なるもの〉の一端を見いだそうとする立場である。調査者－被調査者の関係を社会関係として捉えるアプローチ自体は、本稿で検討する試みと重なってはいる。しかし、フィールドワークでは、（非）言語による相互行為のみがおこなわれているわけではない。また、聞き取りの場ではさまざまな「失敗」が起こる。おそらく、社会関係として徹底する立場では、その「失敗」も、局所的な場面を成立させている一つの要因であると考えられるだろう。この視点は、玉野が「あるモノグラフが社会学的な研究であることを標榜するかぎり、それは何らかの意味で普遍的な社会のイメージを提示していなければならぬ」（玉野 2004: 85）

と指摘し、聞き取りの場において、対象者の語りを規定させる構造を見い出そうとする視点と重なり合う。つまり、「理解と描写が可能になること自体、実は前もって少なくとも当事者と社会学者たる調査者の間に普遍的な社会イメージの共有が前提とされている」（玉野 2004: 85）と言える。

ただ、調査対象者自身をどのように位置づけるか、十分に問われているのか疑問が残る。玉野の立場からは、「対象となる人々の階層的な位置づけに注意しながら、何らかの政治経済的な制度との接点を模索すべきなのである」（玉野 2004: 90）と答えることは出来る。ただこの時、調査対象者の語りを政治経済的な制度を捉えようとするために、政治経済的な制度によって規定された語り、と位置づけられているように思われる。そのため、調査対象者にとっての語り（語ったこと）の位置づけに対して、どのような検討がなされるのか、明確とは言えない。取り逃してしまうこともあるように思われる。例えば、調査対象者が持つ歴史性や、さまざまな矛盾を持った地域社会での暮らしをどのように位置づけるかなどである。もちろん、「調査する私」は調査対象者との関係だけをみればよい、と主張しているだけでは十分とは言えない。ここで、確認しておくべきことは、普遍的な社会イメージではなくとも、調査対象者にとっては一般化された営みが、十分にありうるのではないか、ということである。「コミュニケーションとしての社会調査」という試みは、この地点に立つこととなる。

ただし、本節での検討を経てもなお、「個人」を対象とするフィールドワークにおいて、〈社会的なるもの〉をどのように位置づけるのか、は問われる。次節では、フィールドワークにおける「個人」と何かしらの社会イメージに関して、「個人」に着目した先行者の議論を検討する。

3. 個人史のモノグラフとフィールドとしての個人

フィールドワークのあいだ、分析のために調査対象に対して適切な距離を保とうとすることがある。一方で、分析のために調査対象との距離を取ろうとすることで、逆に捉えるべきはずの対象を捉えそこなうこともある。また、対象と一体感を持つとするために、調査対象者の言葉をそのまま代弁したり、自らの即物的な理解によって、相手を理解してしまうこともある。われわれは、相対的な「調査者と調査対象者」の関係性を、構造的な社会との連関の中でどのように捉えていく事が出来るのだろうか。このような問いは、社会学の古典的命題でもある「個人と社会」の理論的緊張関係や相互行為論における〈社会的なるもの〉の定位について、われわれに再考を求めることになる。

たびたび、(広義の)近代社会では、親族や地域共同体などの多元的秩序が次第に解体し、「個人」が析出され、そのような個人の集合態として「社会」の領域が形成されたと主張される。別の言い方をすれば、仮に、共同体が解体をしても、例えば企業福祉や近代家族などの集団や組織として再組織化されてきた。そのような集団や組織との関係を、われわれは〈社会的なるもの〉として捉えてきた。国家は、いわゆる社会保障としての福祉を遂行することで、われわれの日常生活の一部に関わってきた。しかし、国家や再組織化された集団や組織が、われわれの生活すべてを包みこんでいるわけではない。そのため、さまざまな問題が発生したり、解決が求められたりもする。本節では、「調査者－調査対象者」の関係性と構造的な社会との連関について、佐藤健二の述べるところの「フィールドとしての個人」(佐藤1995: 15)が、社会調査でたびたび前提とされる「社会の単位としての個人」とは一体何が異なるか、検討していく。

「フィールドとしての個人」をより明確な視点から描いた先行者に中野卓がいる。家研究や同族

研究、地域社会調査などに取り組んできた中野は、水島コンビナートの公害調査をおこなった際に、「奥のぼあさん」とよばれていた内海松代と出会う。中野は、彼女への聞き取りを続け、共著という形で『口述の生活史』(1977=1995)を刊行する。この著作は、その後、日本の社会学における生活史研究を含めた質的研究の再興のきっかけとなった。70年代以降、より明確に「個人」への社会学的調査を続けてきた中野は、個人化する社会を捉えるために、「個々の個人の歴史、彼らが家そして家族からどのように自立して個人になっていき、彼ら自身の家族を作り、どのように生き、どのように死んでいくかという『個人史』(life history)のモノグラフを記述すること」(中野2003: 63)を提唱する。では、個人化する社会を捉えるために、個人史のモノグラフを記述することが、どのように構造的な社会との連関を示すことになるのだろうか。

まず、確認しておくべきことは、佐藤の「フィールドとしての個人」とは、実際のフィールドにおいて出会う個人、つまりは調査対象者のことである。このような「個人」を、中野は「各個人は社会的に形成されてきた結果であるとともに、どの時点の現在でも社会により規定されつつ、逆に主体的に社会を規定し返している存在である」(中野1981=2003: 23)と指摘する。つまり、全体としての「社会」から、部分としての「個」を切り取ることを意図してはいない³⁾。むしろ、中野や佐藤らは、「個人」を制度と捉えることによって、制度内に堆積する〈社会的なるもの〉の規定力を明らかにすることを目的とする。このような個人の捉え方は、初期シカゴ学派の代表的モノグラフである『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』(Thomas and zaniecki 1918=1983)で描かれる「個人」とも近い。

初期シカゴ学派の中心的人物であったロバート・E・パークは、「個人」について次のように述べる。「各個人による自己の概念化、社会における個人の役割、そして最終的に個人が獲得する

性格は、その個人がつきあう仲間、より一般的にはその個人が生活する世界によって、たいていは決められている」(Park 1929=1986: 28)。パークが指摘する「個人」に、さらなる個人の歴史性・能動性を見出そうとするのが、佐藤が提唱する「フィールドとしての個人」である。このことは、中野の次の発言にもみてとれる。

歴史的、社会的な大小の状況が通時的に変転しつつ連鎖してきたそのなかで人は成長し、その人なりの主体性を作り上げてきたのです。それゆえ人は自分の置かれた環境とその変化を自分の当面する状況として自分なりに受け留め、多少ともその状況を新たな状況へと変えてきたのです。(中野 1981=2003: 34)

このように、パークと中野は個人に対する社会の規定力について、その位置づけは類似している。また、個人についてパークは、「自己意識と主観性は、それ自体、個人と彼が成員である社会との葛藤の結果であるように、主観性の範囲と生活史の性格は、こうした葛藤の質と度合に相応するだろう」(Park 1931=1986: 137)と述べる。つまり、「個人の主観的現実がどのように維持され、また変化しているのか」に関するメカニズムの把握と個人の構造的な社会への関わり方に着目することを求める。相違があるとすれば、パークは「個人」に対する構造的な社会の規定力に、より積極的な意味づけをおこなっている。それに対して、中野はより個人の歴史性・能動性を強調する。別の地点からみれば、パークの指摘は、個人が〈社会的なるもの〉と断絶していないことを示唆する。一方で、パークは自己の関心は自己アイデンティティと言えないほどの矛盾を持つと指摘する。そして、経験的自己も変化し続けており、個人に不変性を見出し難いと述べる (Park 1972: 29)。それでも、聞き取り調査などへの批判としてあげられる「嘘をつく」ことには限界がある⁴⁾。つまり、固定的ではない矛盾した存在であっても、

個人は矛盾に対して、何かしらの折り合いをつけていく。個人に、不変性を見出すことは難しかったとしても、変わり難い点があるはずである。そこで、中野は〈社会的なるもの〉と断絶していない個人が、自らの集積された社会関係において、何をしてきたのか、何をしているのか。その内的論理を明らかにしていくことを目指す。だからこそ、玉野が批判する、「構造が見えないがゆえの自己への執着」という批判は、われわれの立場からすれば賛同することはできない。むしろ、そのような「自己」に問いを立てることで、その内的な論理を見出そうとする立場をとる。つまり、調査者—被調査者の関係を、ブルデューが述べるところの「第二段階の客観性」(Bourdieu and Wacquant 1992=2007: 23)を捉えるための関係にとどめるのではなく、その関係を含んだ社会関係として捉えていこうとする。

これまでの中野の議論は、調査者—被調査者の関係を社会関係として徹底する立場と変わらないではないか、と思われるかもしれない。ただ、中野は自らの失敗にも自覚的になることで、調査対象者の語られたことを含むその構造を見出そうとする。この点を参照しながら、もう少し、中野のモノグラフを例にみていこう。先に上げた『口述の生活史』(1977=1995)のもう一人の作者とされる内海松代は、中野と出会った頃には80歳を超えていた。「難儀ばかりした人間でナ。風が悪りい。ハッから二一まで、口に言われん難儀イしましたがなァ」(中野 (1977=1995): 281)と述べる松代は、祖母から稲荷信仰の教えをうける呪術宗教的な環境に育ち、内海家に嫁いだ後には大師信仰を信仰する。中野が出会った当時は、両方を信仰していた。中野は、彼女の語りが時にはっきりとした矛盾を含み、「正しさ」や「真実」という視点からでは間違いや勘違いとされる語りを、主観的眞実として一つ一つ聞きとっていく⁵⁾。ここに中野が、松代を単なる調査の客体として捉えるのではなく、調査を受けとめる生活主体として捉えていることが伺える。例えば、中野が松代と

出会うきっかけとなった公害被害に対して、松代は「どこまで逃げてでも公害はありましようが」（中野 1977=1995: 282）と語り、公害問題に対する社会運動のあり方に微妙な距離感を示す。

中野は、この松代の語りに、2つの批判点が含まれているとする。1つは、公害に反対する人々に対して。「公害公害いうて、皆、やいやい言いますが、その『公害』のかげで、もうけよる人々、沢山あるんですぜ」（中野, 1977=1995: 283）と言い、「こりゃどうにもなりません」（中野, 1977=1995: 283）として、批判する。もう1つは、調査者に対して。公害を生産の是非と結びつけて捉えようとする意識調査に対して松代は、「答えにくい」（中野 1977=1995: 283）と述べる。土地の人がどのように言っても、公害のあり方が大きく変わることはなく、ましてや「もうけよる人」がおり、自らの家族を含めた多くの人々が生産に何かしら関わることで、生活している現状がある。このような生活環境のもとで、松代は公害を生産の是非で答えることは自らの生活とズレていると考えていた（中野 1977=1995: 282-3）。おそらく、中野は「どこまで逃げてでも公害はありましようが」という語りに、公害反対運動や調査のあり方に対する「根本的な公害批判」（中野 1977=1995: 285）が象徴的にあらわれていると捉えたのだろう。公害をめぐる松代の住む地区では、公害から逃避するために集団移転の話があった。それに対して、松代は「みんな、どんどん、どんどん普請をしょられますが。（漁場放棄やら何やらで）補償金もろオとるから、どういう考えで、そうされるのか知りませんが、よそへ行くのに、そんな普請するはずないでしょう」（中野 1977=1995: 284）と述べる。

これまでみてきた『口述の生活史』において、中野は、一貫して松代個人の生活に着目し、1970年代の日本社会のありようをミクロな社会的文脈から捉えていく。このような研究のあり方を中野は、「個人を、彼が置かれている状況において、広くは彼の生きている全体的現実において捉え、

すなわち社会によって規定されながら逆に社会を規定している存在として個人を捉える社会学的研究」（中野 1981=2003: 27）であると述べる。つまり、中野は「個人と全体（全体社会）とが直接に相互媒介するのが人間の存在構造である」（中野 1981=2003: 26）と捉えることで、個人が、どのように生活世界を維持し、変容させてきたのか。また、ある出来事に対して、個人がどのような視点や対処法を取ってきたのか。その結果、個人がどのように出来事や経験、また自らの認識を内面化していったのかを、丁寧に把握していくことを唱導する。これまでを踏まえると、『口述の生活史』は、調査対象者の「その人なりの主体性」を主にインタビューから明らかにしていく方法論に関心が集まる中で、モノグラフとしては、一つの時代を生きた、ある女性にとっての生活の基礎づけを明らかにした作品であったと言える。ここで、すぐさま次のような疑問が出てくるだろう。松代の語りの代表性や、松代の語りのみで一般化は妥当なのか。このような疑問は、個人を「社会の単位としての個人」と捉える社会調査において、極めて妥当な批判である。では、「フィールドとしての個人」への視座からではどうだろうか。すぐに、答えを出さず、もう少し迂回し、検討しておこう。

桜井厚（1988）は有賀喜左衛門の社会関係の理論を援用しながら、生成されていく過程としての歴史的な意味、形成されていく集団的ないし社会的な意味、2つの意味が相互媒介の形で成立しているとする立場にたち、「個人」を捉えようとする（桜井 1988: 188）。このような視点は、有賀にとっては主に社会関係の構造を理解するためであった。これに対して、『口述の生活史』以降の中野は、有賀の典型と類型の概念（有賀 1949=1967）に依拠するならば、個人の「典型」のあり方を明らかにすることで、「類型」の変容を見出そうとしているように思われる。既知のことではあるが、中野は有賀社会学を継承・発展させる形で、個人と社会は相互に規定されると位置づけ、

特定集団のモノグラフや個人のモノグラフを重ねながら、何かしらの〈社会的なるもの〉へと連なるモノグラフを描いてきた。例えば、中野は、ムラの転換期となった明治から大正にかけてムラのリーダーであった高橋雄次のパーソナルドキュメントや現地資料、さらに悉皆調査による聞き取りをおこない、ムラ社会の変容を明らかにした『鰯網の村の四〇〇年：能登灘浦の社会学的研究』（1996）では、「全体社会」の概念を、一元的で平面的な単位ではなく、重層する関係性の総体と捉えていた。

ここで取り上げた2つのモノグラフにもみられるが、中野は「個人と社会」を対立的に捉えているわけではない。むしろ、中野は個人のいない社会や、社会のない個人を想定していない。その上で、諸個人が生活している社会を捉えようとしているように思われる。つまり、佐藤のいう「フィールドとしての個人」（佐藤 1995: 15）の視座に連なる中野のモノグラフは、「個人」という制度に個人の能動性と社会の重層的な効果を読み取ろうとする。中野の眼差しに対して、「特殊事例ではないか」「過度の一般化ではないか」、などの批判をおこなうことは出来る。中野は対立した構図としてすぐさま「個人と社会」を描くことはせず、個人に付帯する〈社会的なるもの〉を捉えようとしてきた。つまり、社会変容を個人の生活史から読み解いていくことで、（社会）制度や構造のありようを、より具体的な個人から、豊かに記述出来ると考えていた。では、中野が描いた2つのモノグラフをわれわれはどのような布置に置き直し、理解していくことが出来るのだろうか。

桜井は、「個人」の一般化のレベルについて、クラックホーンとマレーの古典的図式「どのような人間もある点で (a) 他のすべての人々のようである、(b) 他のある人々のようである、(c) 他の誰のようでもない」を提示した上で、より具体的に (a) 普遍的な一般化のレベル、(b) 家族や時代、社会階級、文化あるいはそれらの組み合わせからなる集団の一般化のレベル、(c) 特定の

個人に妥当する一般化のレベル、と置き直す。この3つのレベルは、それぞれが個別に、しかし完全ではなく、何かしら相互に規定しあっているとする（桜井 1983: 258）。言い直すならば、3つのレベルは相対的に独立性を保ちながらも、それぞれのレベルの相互媒介性を考慮する必要があると指摘する。この図式を参照し、中野が描いた2つのモノグラフを区分すると、『鰯網の村の四〇〇年』は、(b) の制度・意識の変動を明らかにする過程で (c) の存在を浮かびあがらせる。『口述の生活史』は、(b) のありようとその変容を (c) の中に見出し、「その人なりの主体性」を描き出そうとする。ここで確認しておくべきことは、ある社会関係を捉えることから普遍的な社会のあり方をすぐさま見出すことに、中野自身は慎重であった。この態度は、フィールドワークに対して頻繁に批判される代表性などに対して、中野なりの自戒を込めた態度であったと言える。その代わりに、中野は、個人の「その人なりの主体性」を描き出すことで、見出される構造を捉えようとする。この地点で、佐藤の唱導する「フィールドとしての個人」と、中野が唱導する「個人史のモノグラフ」は重なり合う。ただし、筆者の準備不足のために、これ以上、中野が描いた2つのモノグラフ、もしくは家や同族集団について明らかにしたモノグラフとの異同について、議論を進める準備は出来ていない。

そこで、P・ブルデューが、ライフヒストリー/ライフストーリーとは何か、を論じた小論「伝記的幻想」（1986=2005）について若干の検討をおこなう。ブルデューは、ライフヒストリーを「学問の世界にひっそり入り込んだ常識的概念の一つである」（Bourdieu 1986=2005: 11）と述べる。ブルデューは、この概念に対して2つの前提が存在すると指摘をする。1つは、一貫した総体を持っているとされる「ライフ」、という視点をわれわれの多くが前提としていること。もう1つは、ヒストリーの視点から、「ライフ」がクロノジカルな秩序にしたがって繰り返り広げられているこ

と。しかし、ストーリーは、出来事の流れを理解することが出来るシークエンスにおいて組織される。そして、ブルデューは「人生のありふれた経験をまとまり・全体として優遇し、認める社会的メカニズムの問題を逃れることはできない」(Bourdieu 1986=2005: 13)と付け加える。例えば、自己の存在をどのように捉えるか、という問題がある。これに対して、ブルデューは「おそらく、全体的なストーリーのまとまりのなかでそれをふたたびとらえようとするにある」(Bourdieu 1986=2005: 13)、と答える。なぜならば、語り手の語りには、歴史的・時間的に変わりにくい、また、異なった社会的場面であっても変わらない点がある。そこに、個人のアイデンティティのありようを見出すことが出来るかと考えることが出来るからである。ただし、線状のストーリーという認識の不安定性に対しては、桜井(2010)が述べるところの「反ストーリー」を考慮する必要がある。

続けて、ブルデューは「伝記的出来事は、社会空間における、つまりより正確には、関連した場で問題となっているさまざまな種類の資本配分構造の、異なる継起的状態における、配置と移動のようなものとして定義される」(Bourdieu 1986=2005: 15)と述べる。ブルデューのこの視点は、小林多寿子が「資本家/労働者階級の関係性が見てとれる一つの生産セクターを対象とし、生産のなかでの日常的実践や生活実態をとらえ、人生の軌跡をあきらかにすることで『階級の関係性』がみえてくるのではないかとベルトーは考えた」(小林 2005 a: 48)、と説明するベルトーの立場に近い。さらに、小林はベルトーが持つ議論の固さに断りをいれながらも、「ライフストーリーへの関心は、主観的な意味をとらえるために個人に焦点をあてるのではなく、ライフコースと実践が埋め込まれた歴史的に状況づけられた社会関係のマトリックスにおいて個人のライフと社会の関係をみることにある」(小林 2005 b: 57)と説明づける。このような具体的な「個人」を捉えるために、

質的調査の一つとしてライフストーリー法は用いられる。そして、そのような「個人」に、断片的ではあるが「歴史的社会的リアリティ」を見出し、比較分析していく過程で、その〈飽和〉が見出されるとベルトーは述べる。ベルトーの方法論は、確かに、社会構造への視点としては、構造主義と比べた時に、必ずしも十分であるとは言えないかもしれない。だからこそ、ベルトーは、われわれが検討してきた水準と構造主義など構造論的視点に重点を置く研究の、架橋を試みたのであろう。しかし、本稿で検討してきたフィールドワークの立場では、第一義的には対象者が持つ多層性に出来る限り開き続けていくことが求められる。その立場から、いかに構造へアクセス出来るか。ベルトーは、パン屋で働く職人の社会移動の上昇過程を明らかにしたように、対象者の内的な論理から〈社会的なるもの〉を捉えようとする。これは、ベルトーや中野ら、70年代のライフヒストリー法の再興において、個人への着目からはじめるフィールドワークに多くみられる。

ただ、こう思う人もいるかもしれない。「歴史的社会的なリアリティ」を「個人」という制度でみていくアプローチは、どのように〈社会的なるもの〉にアクセスしたと言えるのか、不明瞭なままではないか。また、そのときの「個人」は結局、社会単位としての個人ではないのか。このような疑問は、特別な問いではなく、80年代にベルトーとコチェットの間でもおこなわれている⁶⁾。それに対して、ベルトーは2つのアプローチを提示している。1つは、先にあげたようにパリのパン屋の労働者の社会移動について循環的にサンプリングをおこないながら、聞き取りを重ねていく。その結果として、〈飽和〉を見出すアプローチである。

もう1つのアプローチは、ベルトーとP・トンプソンの共編である『Between Generation』(2005)のイントロダクションで示される、家族のストーリーにその特徴をみることが出来る。家族のストーリーは、歴史と社会的変化の両方にと

っての生の素材、社会的記述の興味深い事柄である。なぜなら、家族のストーリーとは、彼らが家族内の伝達を世代間で交換していくシンボリックな造語だからである。家族成員は、語ることで選ばれたストーリーやイメージを構成する。そして、沈黙が維持される事柄は家族成員の心の地図の一部を提示する。同時に、家族成員各自は、彼ら自身特別な社会環境、構造や関係性、家族システムの場所を持っている。家族システムの中で伝えられた家族神話、家族様式などは家族成員各自の生活行程において、欠くことのできない生活の選択を作るための文脈の一部を提供する。そのようなストーリーは、実際の過去の一部を思い出させるだけでなく、家族内の継承のプロセスでもある(Bertaux and Thompson 2005: 1-12)とする。つまり、家族のストーリーは、家族成員の個別具体的なストーリーを意味づけ、同時に個々の「家族らしさ」も形づくることになる。われわれの立場からすれば、〈社会的なるもの〉が構造化されていく過程で、それぞれの「家族らしさ」を見出したり、その変容や個々人の転機にまなざしをむけたりすることになる。

まとめておこう。「フィールドとしての個人」とは、(c)を主な対象とする。さらに、他の「個人」との比較や(b)ならび(a)をどのように位置づけるのかによって、中野が描いた2つのモノグラフは、ある幅を持った視座をわれわれに提示する。言い直すならば、個人史のモノグラフとは、(c)を典型や類型などの概念を用いながら丁寧に把握していき、その過程に〈社会的なるもの〉との相互規定を捉えることで初めて描かれることになる。このことは、「調査する私」を含んだ社会調査における認識の生産ならびにその生産力が問われることになる。「フィールドとしての個人」を「場」と捉えることは、ある個人が持つ社会関係が集積される場として捉えることでもある。翻って、そのような「場」としての個人の相互作用を捉えようする時には、G・ジンメルが指摘した「社会」の存在を発見することが出来る

(Simmel 1908 = 1994: 15)。つまり、われわれが捉えようとする社会とは、「フィールドとしての個人」の視座から個人史のモノグラフを記述すること。そのようなモノグラフを重ね合わせたり、比較することで、ジンメルのいう「社会」を捉えようとするものである。

もちろん、ここでいう「社会」とは、即座にマクロな社会構造とはつながり難い、小さな社会ではある。そこでは、「社会の単位としての個人」が想定された場合には、代表性などについて批判がされる。しかし、「フィールドとしての個人」という視座は、さまざまな社会関係が複雑に集積する場として「個人」を捉え、またそのような個人の相互作用を捉えることを目指そうとするものである。まず、このレベルの社会の姿を捉えることではじめて、ベルトー(Bertaux 1997 = 2003)がおこなったようにより構造的な社会との連関を捉えることが可能となる。結果として、時間的・空間的な広がりを持った歴史性を帯びた「個人と社会」を描くことになる⁷⁾。調査研究方法として、マクロな社会構造をすぐさま明らかにしようとするものではない。だからこそ、対象者に帯びる多層性に関われた態度が求められるのである⁸⁾。ただ、ベルトーが社会構造にアクセスすることを志向するなかで、中野の言う「その人なり主体性」に着目することとは、どのような意味を持つのか。最後に、若干の検討をしておこう。

4. たち止まること——「個人」への社会学的フィールドワークのために

調査者の関心や理解力の深さ、焦点のしぼり方によって「その人なりの主体性」は見出されもするし、無視もされる。また、冒頭で指摘したような「インタビュー社会」という認識が社会的に広まった時には、「語り手の個人の意外な『告白』や聞き手による逸話の『誘導』を期待する視線は強まっていく。反面で、目新しい語りの恣意性や作為性への疑いもいっそう強まらざるをえない」

(古賀 2009: 91) と批判されることもあるだろう。このような批判に対して、質的調査研究法のテキスト化・精緻化は、ある程度批判に対する応答を可能としてくれる。「調査する私」は、古賀が指摘する「期待する視線」に対して、どのように対象を捉えているのか、説明が求められる。そして、「期待する視線」に答えることも、求められるのだろう。ただし、われわれの立場からすればそのような期待は、あくまでも日常生活における「その人なりの主体性」を明らかにする過程において見出されるものである。もちろん、ある痛みを抱えた人々の語りには逸話が隠されているかもしれない。だが、その逸話も調査対象者の日常生活の中にあるはずである。調査者にとって「調査する」ことは、ある意味では作爲的な振る舞いである。このような振る舞いは、調査する過程に付随するにも関わらず、隠される場合が多い。それに対して、作爲を不可視化せず、調査対象者が生活主体でもあることに自覚的になることは、フィールドにおける「調査する私」が何をしているかについて、冒頭で引用した有賀の指摘への答えとなる。

ただ単に、「調査する私」を問えばよい、というわけではない。あくまで「調査する私」は調査者である。だからこそ、「調査する私」が反省すれば、超越的な位置に立つ観察者になるわけではない。このことは、調査対象者にも当てはまる。あくまで、当事者性は「その人なりの主体性」を描くなかで、付与されるべきであろう。なぜなら、本来、当事者性とは前提とされものではなく、〈社会的なるもの〉を描くなかで、当事者性は見出されていくはずである。この意味において、中野のいう「その人なりの主体性」を描くことは、〈社会的なるもの〉を描くことへと連なっていくのである。

「調査する私」にとって、調査対象者の「その人なりの主体性」を描くことは、何を意味するのだろうか。一つは、自らの理解枠組みで、対象者を理解しきるのではなく、より具体的な日常生活

を描こうとするものである。ただ、われわれが注意すべきことは、調査者は決して無知の態度を担いきれるわけではない。だからこそ、「調査する私」のありようを踏まえる必要がある。ただ、「調査する私」が自らの反省に閉じられた場合、どこかに反省していない私の存在を残すことになる。そのため、常に「調査する私」は調査対象者に向き合い、「その人なりの主体性」を描こうとする態度が求められる。「個人」への社会学的フィールドワークとは、まず自らとは異なる生活世界を生きる個人に出会うことである。それは、調査対象者に対する理解がどこかで届かないことを実感する試みでもある。この地点から、理解可能なことを、一つ一つ描き続けることで、「その人なりの主体性」は描かれていくことになる。つまり、社会の規定力に応答したり、無視をしたり、やり過ごしながらか生きてきた個人のありようを描こうとするものである。

歴史的現在という地点から、調査対象者の経歴史を描くことで、何かしらの〈社会的なるもの〉の歴史を描き出すこと。この迂遠な試みの先に、玉野の指摘する「普遍的な社会イメージ」と中野の指摘する「その人なりの主体性」が重なりあうモノグラフが描かれるはずであろう。もちろん、「個人と社会」という理論的緊張関係を思いだすまでもなく、すぐさま描かれるものではないのかもしれない。それでも、理解できないことを捨象してモノグラフを描くのではなく、桜井(2010)のいうところの「反ストーリー」を踏まえた個人像を、「その人なりの主体性」を描いていくこと。そこには、個人史が持つ歴史構造など、何かしらの〈社会的なるもの〉を見出すことが出来るはずである。

もちろん、ここで検討した「個人」への社会学的フィールドワークのあり方は、いくつもある質的調査研究法の一つである。例えば、期待される視線にこたえ得る個人だけを対象としたり、ある個人に社会的属性の代表性を見出そうとする試みなど、さまざまな立場が確かにある。本稿では、

質的調査研究法のテキスト化・精緻化における現在の社会学的フィールドワークにおいて、「調査する私」に焦点を当てることで、「個人」をどのように捉えることが出来るのかについて検討してきた。最後に、1点つけ加えておこう。「個人」への社会学的フィールドワークにおける「個人」とは、「1人」という人数を表しているのではない。「個人」への社会学的フィールドワークでは、諸個人が持つ「その人なりの主体性」を発見することを目的としている。繰り返しになるが、その目的は、フィールドで出会う個人が持つ「その人なりの主体性」を、理解できない、という居心地の悪さにたち止まりながら、出来る限り理解していこうとする態度が前提となる。以上のように、「その人なりの主体性」を把握していく「個人」への社会学的フィールドワークは、ただ小さな社会に閉じられるだけでなく、構造的な社会的要素が刻まれた小さな社会の姿を描くことを第一の目的とする。

社会学の誕生が、社会のアノミー状態に対する自己意識から出発したのであれば、さまざまな〈社会的なるもの〉が問い直されようとしている現代社会において、たち止まることから始める社会学もありうるはずである。もしかしたら、このような社会学的態度は、質的調査研究法がテキスト化・標準化されるなかで時代遅れなのかもしれない。もし、そうであるならば、積極的に時代遅れの社会学的態度を取ろうではないか。さまざまな新奇な概念や、実践を志向するあまり、多くの先人らによって積み重ねられてきた概念を表象的なものとどめて、広範に使用していく社会学より、いくぶんかは調査対象者を理解することが出来るだろう。

本稿で検討したことは、実際に「個人」への社会学的フィールドワークをもとにして描かれる社会学的モノグラフによって、その是非が決まるであろう。今後の課題としたい。

注

- 1) 例えば、Gubrium and Holstein (2001: 9-10)。
- 2) 例えば、松繁 (2008)。
- 3) D・ベルトーは、ライフストーリーを用いる理由として、次のように述べる。「観察された相互行為の根底にある論理を理解しはじめて、主観的な意味や間主観的な意味をとらえ、社会的《客観的な》意味に接近できるのである」(Bertaux 1997 = 2003. 43)。この指摘は、中野が個人を対象とし、〈社会的なるもの〉を捉えようとした試みと通底する。
- 4) 例えば、Garfinkel (1967 = 1987)。
- 5) 例えば、中野 (1977 = 1995: 41 - 51)。また、聞き取りの態度について、有菌 (2008)。
- 6) 小林は、論争相手の一人であったコチュトとベルトーの議論は噛み合っていなかったとする。(2005: 57)
- 7) ベルトー (Bertaux 1997 = 2003) は、フランスのパリのパン屋で働く職人のライフストーリー・インタビューをおこない、内容の〈飽和〉を目安として、パン屋におけるパン職人の社会関係の構造を明らかにしている。このような個人の捉え方は、中野の「私は個人の生活史のモノグラフの研究を理論形成に役立ちえない無駄苦勞とも文学的趣味嗜好によるとも考えてない」(中野 2003: 65)とする指摘に、より積極的な意味を与えることになる。ただし、中野とベルトーの間には、理論化への志向性が異なる。対象者の内的論理をどのように取り扱うのか、この事は調査対象との兼ね合いであるが、オーラリティの場における社会認識のあり方については、拙稿 (2010) で若干の検討をおこなっている。
- 8) また、佐藤健二がいうところの「方法論的基礎づけ」(佐藤 2003) を志向することにもなる。

参考文献

- 有賀喜左衛門, 1949 = 67, 「封建遺制の分析」『有賀喜左衛門著作集Ⅳ』未来社, 15-57。
 ——, 1977 = 2000, 「有賀喜左衛門先生最後の講和」

- 北川隆吉編、『有賀喜左衛門研究——社会学の思想・理論・方法』東信堂, 7-84.
- 有蘭真代, 2008, 「コラム2 真実を受けとめる」武田丈・亀井伸孝『アクション別 フィールドワーク入門』世界思想社, 76-77.
- Bertaux, D. 1997 *Les récits de vie: perspective ethnologique*, Nathan (=2003, 小林多寿子訳, 『ライフストーリー——エスノ社会学的パースペクティブ』ミネルヴァ書房.)
- Bertaux, D. and Thompson, P. ed., 2005, *Between Generation Transaction Pub*; New edition
- Bourdieu, P. and L. J. D. Wacquant, 1992, *An invitation to Reflexive Sociology*, Chicago: University of Chicago Press. (=2007, 水島和則訳, 『リフレクティブ・ソシロジーへの招待——ブルデュー, 社会学を語る』藤原書店.)
- Bourdieu, P. 1986 *L'illusion biographique*, *Actes de la recherche en sciences sociales* 62-63: 69-72 (=小林多寿子訳 2005 『日本女子大学紀要人間社会学部』16, 11-16.)
- Clifford, J., & George. E. Marcus. (Eds.). 1986 *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley: University of California Press. (=1996, 春日直樹他訳, 『文化を書く』紀伊國屋書店.)
- 柿崎京一, 黒崎八洲次良・間宏編, 1988, 『有賀喜左衛門研究: 人間・思想・学問』御茶ノ水書房.
- Garfinkel, H. 'Passing and the managed achievement of sex status in an "inter sexed" person part 1' an abridged version H. Garfinkel, *Studies in Ethnomethodology*, prentice-Hall, 1967, pp.116-185. (=山崎敬一訳, 1987, 「アグネス, 彼女はいかにして女になり続けたか——ある両性的人間の女性としての通過作業とその社会的地位の操作的達成」好井裕明他訳『エスノメソロジー—社会学的思考の解体』せりか書房, 215-296.)
- Goffman, E. 1989, *On Fieldwork Journal of Contemporary Ethnography* 18-2: 123-132 (=串田秀也訳, 2000, 「フィールドワークについて」好井・桜井編『フィールドワークの経験』せりか書房, 16-26.)
- Gubrium, J. F. and J. A. Holstein, 2001, "From the Individual Interview to the Interview Society." *Handbook of Interview Research: Context & Method*, Sage, 3-32.
- Holstein, J. A. and Gubrium J. F., 1995, *The Active Interview*, Thousand Oaks, Calif: Sage, (=2004 山田富秋他訳『アクティブインタビュー——相互行為としての社会調査』せりか書房.)
- 小林多寿子, 2000, 「二人のオーサー——ライフストーリーの実践と呈示の問題」好井裕明, 桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房, 101-14.
- , 2005a, 「ライフストーリー法リバイバルと階層研究からの出発——D・ベルトーの展開」『社会学研究』77, 45-64.
- , 2005b, 「ピエール・ブルデュー「伝記的幻想」とライフストーリー論」『日本女子大学人間社会学部紀要』16, 17-26.
- 串田秀也 2000 「訳者解説」桜井厚・好井裕明編『フィールドワークの経験』せりか書房 p 24-6.
- 古賀正義, 2009, 「録音素材から調べ構築するリアリティの重層性——インタビューのエスノグラフィーを实践する」『社会学評論』60(1), 90-107.
- 町村敬志, 2004, 「行きずりの都市フィールドワーカーのために」『社会学的フィールドワーク』世界思想社, 33-61.
- 松繁卓哉, 2008, 「批判的言説分析をもたらす健康と病の社会学—制度区分の批判的分析へ—」『社会学研究科年報』15, 7-18
- 中野卓編, 1977 = 1995, 『口述の生活史』御茶ノ水書房.
- 中野卓, 1981, 「個人の社会学的調査研究について」『社会学評論』32(2) (=2003 『生活史の研究』, 23-45.)
- , 1996, 『鱒網の村の四〇〇年: 能登灘浦の社会学的研究』刀水書房.
- , 2003, 「都市の個人の生活史」『生活史の研究』東信堂. 57-70

- , 2003, 『中野卓著作集生活史シリーズ 生活史研究』東信堂.
- ・桜井厚編, 1995, 『ライフストーリーの社会学』弘文堂.
- Robert E. Park, 1929, "The City as Social Laboratory", T. V. Smith and L. D. White eds., Chicago: *An Experiment in Social Science Research*, Chicago: University of Chicago Press, 1-29. (= 1986, 町村敬志訳, 「社会的実験室としての都市」町村・好井編訳, 『実験室としての都市——パーク社会学論文選』御茶ノ水書房. 11-35.)
- Robert E. Park, 1931, The Sociological Methods of William Graham Sumner, and Florian Znaniecki, Stewart A. Rice (ed.), *Methods in Social Science: A Case Book*, Chicago: Univ. of Chicago Press (= 1986, 好井裕明訳, 「サムナー, トーマス, ズナニエッキーの社会学的方法」町村・好井編訳『実験室としての都市——パーク社会学論文選』p 113-54.)
- Robert E. Park, 1972, *The crowd and the public, and other essays*; edited and with an introduction by Henry Elsner, Jr.; translated by Charlotte Elsner; note by Donald N. Levine Chicago: University of Chicago Press.
- 佐藤健二, 1995, 「ライフストーリーの位相」中野・桜井編『ライフストーリーの社会学』弘文堂, 13-41.
- , 2003, 「『質的データ』論の位相」日本社会学史学会編『社会学史研究』第25号, 3-18.
- 玉野和志, 2004, 「魅力あるモノグラフを書くために」好井・三浦編『社会的フィールドワーク』世界思想社. 62-96.
- 齋藤雅哉, 2010, 「2000年代の『当事者』をめぐって」『日本オーラル・ヒストリー研究』第6号 p 53-56.
- 桜井厚, 1983, 「生活史の研究課題」Thomas and Znaniecki, 1918=1927 (= 1983, 『生活史の社会学』御茶ノ水書房, 245-265.)
- , 1988, 「有賀理論的方法的基礎と生活史研究」柿崎京一, 黒崎八洲次良・間宏編『有賀喜左衛門研究：人間・思想・学問』御茶ノ水書房, 171-209.
- , 2002, 『インタビューの社会学——ライストリーの聞き方』せりか書房.
- , 2010, 「ライフストーリーの時間と空間」『社会学評論』60(4)481-499.
- Simmel, G. 1908, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*. Duncker und Humboldt, Berlin. (= 1994, 居安正訳, 『社会学上』白水社.)
- W. I. Thomas and Florian Znaniecki, *The Polish Peasant in Europe and America*, First Published, Boston: Richard Badger, 1918, 5 vols. republished, New York: Alfred A. Knopf, Inc., 1927, 2 vols. (= 1983, 桜井厚訳, 『生活史の社会学：ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』御茶の水書房。(妙訳))